

第27回 日・韓・中ジュニア交流競技会 参加報告書

2019年8月22日（木）～29日（木）

中国・湖南省長沙市



全国高等学校体育連盟テニス専門部

【 参加者 】

総監督 岸 徹（全国高等学校体育連盟テニス専門部副部長）
男子監督 徳丸 真史（四日市工業高等学校）
女子監督 高橋 司（法政大学第二高等学校）

男子選手 大田 空（四日市工業高等学校）
高畠 里玖（相生学院高等学校）
田中 瑛大（湘南工科大学付属高等学校）
藤原 智也（東山高等学校）

女子選手 松下 菜々（相生学院高等学校）
大川 美佐（法政大学第二高等学校）
高岡 鈴蘭（沖縄尚学高等学校）
神鳥 舞（早稲田実業学校）







<試合結果 詳細> 8月25日(日)

男子	日本	1 - 3				中国
S1	田中 瑛大	0	1	—	6	BU YUNCHAOKETO
			3	—	6	
			—	—	—	
S2	藤原 智也	2	6	—	3	LI HAMWAN
			6	—	4	
			—	—	—	
Db	大田 空 高畠里玖	0	1	—	6	BU YUNCHAOKETO LI HAMWAN
			6(2)	—	7	
			—	—	—	
S3	高畠 里玖	1	3	—	6	ZHANG BAO LUO
			6	—	3	
			8	—	10	
S4	大田 空		—	—	—	ZHANG YU
			—	—	—	
			—	—	—	

女子	日本	1 - 3				中国
S1	神鳥 舞	2	2	—	6	WANG JIAGI
			6	—	3	
			10	—	3	
S2	松下 菜々	1	6(5)	—	7	ZHAO CONGYING
			6	—	1	
			5	—	10	
Db	神鳥 舞 大川美佐	0	4	—	6	DONG NA XIAO ZHENGHUA
			5	—	7	
			—	—	—	
S3	高岡 鈴蘭	0	1	—	6	XIAO ZHENGHUA
			2	—	6	
			—	—	—	
S4	大川 美佐		—	—	—	DONG NA
			—	—	—	
			—	—	—	

※ 団体戦勝敗決定後打ち切り

<試合結果 詳細> 8月26日(月)

男子	日本	3 - 1				韓国
S1	藤原 智也	2	6	—	3	JUN HYEON LEE
			6	—	1	
			—	—	—	
S2	大田 空	2	6	—	3	HYEON DEOK YOON
			6	—	2	
			—	—	—	
Db	高畠 里玖 田中 瑛大	1	3	—	6	SEOK HYEON CHU JUN HYEON LEE
			6	—	3	
			9	—	11	
S3	高畠 里玖		—	—	—	SEOK HYEON CHU
			—	—	—	
			—	—	—	
S4	田中 瑛大	2	6	—	1	SEUNG HA SONG
			3	—	6	
			10	—	6	

女子	日本	2 - 3				韓国
S1	松下 菜々	0	2	—	6	EUN JI LEE
			1	—	6	
			—	—	—	
S2	大川 美佐	2	7	—	5	JEONG MOON
			6	—	1	
			—	—	—	
Db	松下 菜々 高岡 鈴蘭	0	1	—	6	EUN JI LEE HYE SEO SHIN
			4	—	6	
			—	—	—	
S3	神鳥 舞	2	7	—	5	EUN JI OH
			6	—	3	
			—	—	—	
S4	高岡 鈴蘭	0	5	—	7	HYE SEO SHIN
			3	—	6	
			—	—	—	

※ 団体戦勝敗決定後打ち切り

<試合結果 詳細> 8月27日(火)

男子	日本						長沙市
S1	大田 空	2	6	—	0	0	YE OIFENG
			6	—	0		
			—	—	—		
S2	田中 瑛大	2	6	—	1	0	CHU XIANG
			6	—	1		
			—	—	—		
Db	大田 空 藤原 智也	2	6	—	3	0	XIONG SHARON GONG YINMIN
			6	—	1		
			—	—	—		
S3	藤原 智也		—	—	—		XIONG SHARON
			—	—	—		
			—	—	—		
S4	高畠 里玖		—	—	—		GONG YINMIN
			—	—	—		
			—	—	—		

女子	日本	3 - 0					長沙市
S1	神鳥 舞	2	6	—	0	0	LUO XIAOYE
			6	—	0		
			—	—	—		
S2	大川 美佐	2	6	—	3	0	ZENG ZIXUAN
			6	—	4		
			—	—	—		
Db	神鳥 舞 大川 美佐	2	6	—	2	0	LI NINGXIN MU ZIRONG
			6	—	2		
			—	—	—		
S3	松下 菜々		—	—	—		MU ZIRONG
			—	—	—		
			—	—	—		
S4	高岡 鈴蘭		—	—	—		LI NINGXIN
			—	—	—		
			—	—	—		

※ 団体戦勝敗決定後打ち切り

第27回日・韓・中ジュニア交流競技会に参加して

総監督 岸 徹（全国高体連テニス専門部副部長）



8月21日（水）東京ナショナルトレーニングセンターに集合し事前合宿が始まった。日本テニス協会のご協力により、オリンピックを目指す日本のトップアスリートが集うこの施設を利用して2日間練習を行った。お世話頂いた日本テニス協会NTCマネージャー染谷俊一氏には、コートの確保や施設案内、栄養講座など代表選手のためにお世話頂き感謝している。

22日（木）、品川プリンスホテルに10競技の選手団が集合しユニフォームが配布された。結団式が行われ、選手のモチベーションも次第に上がってきました。

23日（金）は、6時30分にホテルを出発し、9時5分羽田空港発で上海空港に向かいそこから国内線に乗り換え長沙空港に着いた。ホテルに着いたのが8時過ぎ、丸一日かけての移動。早くも国際大会で戦うコンディション作りの難しさを体感した。

24日（土）は、午前中会場での練習。会場は、バスで20分ほどにある湖南省テニスセンター、ソフトテニスと同じ会場でテニス競技は4面で試合をする。飲み物や氷は、準備されていたので助かったが、気温が35度以上と暑く試合への影響が心配であった。

午後監督会議があり細かいルールが提示された。3セットマッチ（ファイナルスーパー タイブレーク）・ノーアドバンテージでノーレット。試合順は、Sg-Sg-Db-Sg-Sg-の順で3ポイントとった時点で終了。日本選手が、経験したことの無いルールであった。

試合は、中国が地元開催であるためITFランキング選手を入れてくる程強力なチームであった。日本もチームワークよく善戦したが、中国の壁は厚かった。中国はリードされていても競っていてもぎりぎりのダウンザラインを狙ってきたりと、ここでこんなショットが打てるのかというショットがしっかり入ってきた。韓国は、とにかく粘り強いストロークで日本も苦戦した。男子は、何とか攻め抜き勝利。女子は、粘りに苦戦し2-3の惜敗。

この2日間は、朝から試合が入って雨天のため室内に移動もあり、ホテルに戻ったのが

初日午後7時30分、2日目午後8時。しかも気温が35度以上と選手たちにとって過酷な2日間であった。それでも選手は、精一杯いい試合をし、試合が無いときでもチームの応援をしたり、お互い声かけ合ったりとチームワークもよく正々堂々と戦ってくれた。

最終日の対長沙市チーム戦では、相手チームを寄せ付けない会心のゲームをしてくれた。

この3日間、男子は一人一人が相手に動じることも無く自分の持てる力を十分に発揮してくれた。

女子もよく頑張ってくれたが、対韓国戦の後、一人が体調を崩し救急搬送、その付添で監督と一緒に付き添った一人がほとんど睡眠時間がとれず。翌日の対長沙市チーム戦では2名のシングルスとその2名で組んだダブルスで決着を付けるしか無い状況の中、2名で3ポイント先取して他の2名に試合をさせずにすんだ。

これは、選手一人一人がしっかり指導されている事もあるが、今回監督として出場した徳丸・高橋両監督が事前合宿から選手をうまくまとめ、選手一人一人の力を引き出してくれた指導力のおかげだと思う。両監督には、本当に感謝したい。また私自身も非常に勉強になった。

最後に、今回日本代表として戦った選手が、この経験を生かしこれからグローバルな世界で戦ってくれることを楽しみにするとともに、今回このような機会を作って頂いた日本スポーツ協会・日本テニス協会そして高体連テニス専門部の関係各位に心から感謝を申し上げたい。

第27回日・韓・中ジュニア交流競技会に参加して

男子監督 徳丸真史（三重県：四日市工業高等学校）



本競技会に出場したテニスの選手達は、向上心が強く、国際感覚や人間形成を高めようとする意気込みや雰囲気を持って臨んでいました。日の丸を付けて、国別対抗戦を戦うことの経験は非常に大きなものとなり、今後に生かされる体験だったと感じています。

準備段階として、全国高体連テニス部が先導してインターハイの会場でミーティングを施し、NTCで事前合宿をしました。日頃は個人戦が多いので、ライバルとなる選手達が力を合わせることに対して意識付けをしていくことは効果的だったと思います。また、会場となるコートサーフェスや試合球を用意して練習できたことは、選手達にとって安心につながっていました。

競技面としては、ホームの中国チームがかなりの準備をしていた印象があります。監督もアジア圏内で活躍していたプロ選手を配置し、選手も世界各国を転戦している世界ジュニアランキング上位のメンバーで構成されていました。また、最大の敵と評されていた日本との対戦を初日に組み、試合方式、試合進行、コート選択など地の利を生かしたスケジュールとなりました。特に、中国チームから2-1とリードし、あと1試合が勝敗を左右するといったゲームの中での戦いっぷりは、国別対抗戦にふさわしいものでした。劣勢からのファイティングスピリット・応援は、国を代表する意識が前面に出ていて我々にも大きな圧を感じさせられました。選手は戦いながら、間違いなく経験したことのないプレッシャーを感じていたこととなります。次戦の韓国戦も同じ雰囲気を感じる試合がありました。2-0と日本チームがリードして、あと1試合勝てばというゲームで韓国が信じられない闘志をむき出しにして向かってきました。接戦となり、そのゲームは韓国の勝利となり、2-1で勝利は持ち越しとなりました。ここで監督・選手がミーティングを行い、国別対抗戦の意義や戦う姿勢を再確認しました。消極的な表情・焦りは消え、残りの試合はしっかりと戦うことができ、勝利を自分たちの手でもぎとりました。

フェアプレー精神の元、真剣勝負が熱く繰り広げられたことは今後に大きくつながると思っています。対戦後の両国の讚え合い、笑顔が印象的でした。

生活面としては、ホテル内で過ごしやすく、氷やミネラルウォーターなどの確保が有り難く感じました。また、通訳の学生が親身になってリクエストに応えようとする姿に感謝の気持ちでいっぱいです。ホテルのロビーでは対応できるスペースを準備してもらって安心感もありました。実際にトラブルが出ましたが、各方面で早急に最善の対応ができたことは非常によかったです。課題としては、日頃とは異なる食事面の克服が上手くできなかつたことです。海外経験が乏しく、食が細い選手にとって難しさがありました。調味料や補助食品を工夫して準備していくべきだと痛感しました。

最後になりますが、日本選手団としての派遣を進めていただいた関係各位に感謝を申し上げます。競技団体としても、私個人としても、この経験を生かしていこうと思います。27回と歴史ある競技会に参加させてもらい、嬉しさを感じながら1週間を過ごしました。ありがとうございました。

第27回　日・中・韓ジュニア交流競技会を終えて

女子監督　高橋　司（神奈川県：法政大学第二高等学校）



「ナイス・ショット！！」

決して野次ではなく、低く重低音の響く声援。

それは団長である　岸先生のフェンス越しの声でした。

異国において日本語の応援は大変、本当に心強いものです。

チームJAPANが事前合宿として集結したのは8月21日の午後、NTC（ナショナルトレーニングセンター）でした。染谷俊一さん（日本テニス協会の強化本部・NTCマネージャー）のご厚意で練習前に施設見学やドーピングについての話を聞くことが出来ました。NTC内にはオリンピック候補選者など有名な選手ともすれ違う中で、彼らも『JAPAN』を肌で感じたことでしょう。池袋のホテルで各メーカーから支給される物品には『JAPAN』の文字やマークが入っていることで、より一層代表としての意識が高まりました。22日の午前中にNTCでの練習前には車イステニスの選手から、海外で戦う心構えを伺いました。昼食はNTCの食堂で食べる際、栄養指導の方から食事についてのお話は非常に参考になりました。夕方から日本選手団の結団式がある品川プリンスホテルへ移動。他競技のメンバー（総勢250名近く）とも顔を合わせて、より一層気持ちも高ぶりました。翌朝6時に荷物を積み込み羽田空港へ向かい、出国手続き。テニス競技は羽田空港→上海空港（バスで国内線まで移動）→長沙空港に着いたのは20時を過ぎていました。この日は移動の1日となりました。

一番気になるホテルは3カ国の選手団全てが宿泊する大きな華雅国際大酒店（バヤ・インターナショナルホテル）です。選手は2人部屋、引率者が1人部屋という事で長旅も癒やされました。（昨年の韓国では監督コーチは3人部屋と聞いていましたので）

24日の午前中に大会会場にて公式練習をおこない、その際ヨネックス中国に在勤の齋藤氏より中国生活の注意事項なども聞くことが出来ました。午後は監督会議がホテルのホールにておこなわれました。中国語・ハングル語・英語が飛び交う中、不明な点は徳丸監督が何度も質問をしていました。（夕方からは市内の長沙人民会堂にて3ヶ国揃っての開会式）

大会戦績

25日	大会初日	1勝3敗	中国	シングルス1勝2敗	ダブルス1敗
26日	2日目	2勝3敗	韓国	シングルス2勝2敗	ダブルス1敗
27日	最終日	3勝	長沙（開催地チーム）	シングルス2勝	ダブルス1勝

前日の監督ミーティングで「1面展開」と聞いていたので午前中は何時まで試合をやるのか、昼食は一度ホテルまで戻って、再度コートに向かうパターンと聞いていたが何時から再開するのかが当日まで分かりませんでした。また①ITFでは採用されている『ノーレット』を適用、②打ち切りあり、③シングルス2が終わってから10分以内にダブルスマンバーの登録を変更可能など多岐に渡って知ることになりました。

初日の中国戦、S1の神鳥は1セットダウンから挽回して10ポイントタイブレークを制して、幸先良いスタート。S2の松下も途中雨天中断から6-7(5)、6-1、5-10でよく頑張りましたが敗退。ダブルスは神鳥・大川がパワーに押し切られる形で4-6、5-7。S3の高岡はインドアコートに移動して敗退。1-3で中国チームに負けました。中国チームの特徴は高身長の選手やパワーヒッターの選手が多く、特にサービスゲームではノータッチエースをアドコートからワイドに何本も決められる形が多かった。

翌日の韓国戦ではS1の松下はストレート負け、S2の神鳥は前日に引き続き接戦を乗り切ったが、続くダブルスの松下・高岡がセカンドセットこそシーソーゲームに展開し始めたところで雨天中断。インドアコートに移動して流れが変わるかと思われる内容だったが最後は韓国のダブルス巧者にボレーで決められて敗退。S3の大川は雨天中断になる前に7-5、6-3のストレート勝利を決めた。2-2となってからのS3は高岡が持ち前のパワーヒットが面白いように決まり、一時はリードしたがそこから挽回されて敗退。韓国戦の結果は2-3という接戦であったが、勝負どころで韓国テニスの粘りやエース級のショットをダウンザラインにノータッチエースで切り返えされるパターンが多かった。

この後、ハプニングが起こった。韓国戦の後、20時過ぎにホテルへ戻るバスの中でS3の高岡が体調不良になった。症状は{お腹が痛い・寒い・身体が強ばる}などである。何とかバスを降りてホテルロビーにあるソファで休むが回復しないのでホテル在駐のドクターを呼ぶことになった。適切な判断のもと救急車にて病院搬送となつたが、この救急車の助手席に乗った私の感想は人生で忘れられないシーンとなつた。お国柄、色々な事情があるのは理解できるが救急車がサイレンを鳴らし、クラクションを鳴らし、パッシングをするが全くといっていい程クルマは道を譲らないどころか、寄せることもしない。後ろでは苦しんでいる高岡を横目に私は「早く早く」と気持ちが焦るばかりであった。約20分後に救急搬送されてから問診され、腹痛を訴えることから虫垂炎の疑いもあるためCT

検査・血液検査・尿検査などを受けて、結果が出たのは0時過ぎ。水分摂取過多による腹痛ではないかとの診断であった。救急車の費用、検査費用を岸先生から預かった財布から支払い、ホテルに戻った時間は1時近くであった。翌日の試合に高岡は出さないことを岸先生に伝えてから部屋に戻り、洗濯を済ませてベッドで休んだ。(※中国ではホテル内や周辺にコインランドリーがないため、監督も選手も部屋で各自、洗濯をすることになる。)

最終日、3人の選手で地元長沙市チームと対戦。S1神鳥、S2大川は2ゲーム以上を与えるワンサイドゲームで圧倒。さらに2人で組んだダブルスでも見事なコンビネーションで勝利を収めた。{注；松下は前日の救急搬送に同行したため、起床時間を遅らせて会場に入り調整したため出番はなかった}

私自身、いくつかの疑問を持ったので箇条書きにしてみたいと思う。

①試合進行が毎日異なる点。(中国VS日本は1面展開、中国VS韓国はイントアで2面展開)
②ソフトテニスはどれだけ長くても午前中に終了するのに空きコートは使用しない。
③テニスでは、それほどなかったが他種目では自国有利と思えるジャッジが多々あった。開催国が判断すべき問題であるが、男子の徳丸監督が何度も大会本部に訴えるが、その都度運営サイドとは違う方面からの圧力なのか訂正が入るので日本チームの要求が通ることはなかった。もし、これが次年度開催の日本だったら、このようなケースにはならないだろう。

日本では同じ条件で臨むことが期待するが、それが果たしてフェアプレイに繋がるのだろうか。

また改めて食事に関する考え方方が深まった。今回、中国での食事だが日本人選手の偏食が気になった。アスリートとして食事が重要なことは分かっているが、実際に毎日同じ料理を3食食べるとなると、工夫をしなければ厳しいことも否めない。韓国チームは必ず『キムチ』を持参していた。昨年の韓国遠征の食事情は分からぬが、3年後の中国開催の時には、事前に日本食や調味料、試合中の補食なども用意することが望ましいと考える。

今回初めて、日本選手団として引率に関わったが、同行する方が岸先生(大学の先輩)と徳丸先生(法政大学1年からの知り合い)だったので何事もスムースに連携を取りながら日程を消化することが出来た。

素晴らしい経験をさせて頂き、関係各位には感謝の念しかありません。

第27回日・韓・中ジュニア交流競技会に参加して

大田 空（三重県：四日市工業高等学校）



日中韓ジュニア交流会を通して、たくさんのこと経験することができました。

まず、高校に入ってから初めての海外遠征ということで、不安や緊張もあり、上手くやっているか自信がありませんでした。しかし、遠征前の味の素ナショナルトレーニングセンターで二日間練習していく中で、少しづつ緊張がなくなりました。

中国に着いてからは、コートサーフェスが速く、慣れない環境の中で試合に向けて調整していくのは、インターハイや全日本ジュニアなどの国内大会とは違う難しさがありました。ただ、一緒に行ったメンバーや先生方を含めた練習の中で、少しづつ中国での環境に慣れていきました。開会式では日本選手団の旗手というとても貴重な経験をさせてもらうことができました。少し緊張しましたが楽しく終えることができました。その時、「これから改めてがんばっていこう」と思いました。

中国・韓国・湖南省との交流試合では、対戦したことのない選手と試合をすることができて、とても良い経験をすることができました。中国チームとの試合では、1-3で敗退し、私自身も負けてしまいましたが、チームが一丸となって戦うことができてよかったです。韓国・湖南省のチームには勝利することができて、最終的に優勝とはなりませんでしたが、力を出し切っての結果だと感じています。

この遠征を通して、日本だけではなく海外の人とも交流を深めることができ、非常に良い経験となりました。この貴重な体験を今後の自分に生かしていこうと思います。ありがとうございました。

第27回日・韓・中ジュニア交流競技会に参加して

高畠 里玖 (兵庫県：相生学院高等学校)



はじめに、今回の日・韓・中ジュニア交流競技会をサポートしてくださった多くの皆様、そして、引率をして頂いた先生方に感謝します。ありがとうございました。

今回は雨の影響もあり、アウトドアコートとインドアコートどちらでも試合をすることになりました。雨で一時中断し流れが行き来する中での試合で正直大変な思いをしました。また、国内の大会では対戦することのないような、体格が一回りも大きな選手との対戦にも非常に緊張しました。実際に対戦してみると、力で圧倒され大きなプレッシャーを感じました。そのためパワーで勝負するのではなく、テンポを変えたりコントロールに気をつけて戦うことを心がけてプレーしました。しかし、相手選手の追い込まれたときの一本、大事な場面でのサーブの力強さを経験し、自分にはまだ足りないものが沢山あると感じました。同時に、そうした中でも何とかポイントを取るために試行錯誤し対策を立てることが出来たのは大きな収穫となりました。そして、これまでライバルだったみんなと同じチームとして最後まで戦えたことはとても嬉しかったです。

今回の遠征で初めて日本代表として試合をし、日の丸の重みを感じたり、これまでに無い貴重な経験をさせてもらい多くの刺激をもらいました。今回の経験をこれからテニス生活や日常生活に生かしていきたいです。本当にありがとうございました。

第27回日・韓・中ジュニア交流競技会に参加して

田中 瑛大 (神奈川県：湘南工科大学附属高等学校)



まず、はじめにこの遠征を手厚くサポートしてくださった役員の先生、本当にありがとうございました。

試合に向けての準備として味の素ナショナルトレーニングセンターでは他競技のトップアスリートの練習風景から刺激を受けました。また食事について栄養士の方から指導を受け自分の食生活を見直すことが出来ました。そして日本代表として戦うことに普段の団体戦とは全く違う緊張感がありました。ライバルとして競い合ってきた選手達との初めてのチームだったのですが集まってすぐ目標の優勝に向けて団結することが出来ました。現地中国では猛暑の中での試合になりました。普段戦っている日本人とは異なり体系が大きくパワープレーで押してくる選手が多い中、私の武器であるフットワークを生かして戦いました。国と国との戦いの中で自分たちのリクエストが通らないことも多く厳しい戦いになりました。厳しい戦いの中でチームメイトの応援が大きな力になることを学びました。

また現地では食事面で壁にぶつかりました。普段では口にしないような蛙の肉などエネルギーをつけるために食べていました。体調を崩す選手も出ていた中で私は食事をしっかり取ることができました。日本とは少し違った文化を知り理解することができました。

内容の濃い充実した日々を過ごすことができ、その場でしか感じられない緊張感や達成感味わうことができました。この遠征を今後のテニス人生に生かし更なるレベルアップに繋げていきたいです。

ありがとうございました。

第27回日・韓・中ジュニア交流競技会に参加して

藤原 智也（京都府：東山高等学校）



今回、全国高体連テニス専門部の皆様をはじめ、帯同された岸先生、徳丸先生、高橋先生には遠征期間中、大変お世話になりました。

今まで日本代表として海外でプレーをすることはありましたが、団体戦で戦うことは未経験だった為、とても良い刺激になりました。さらに、全国のトップの選手達と切磋琢磨し、良い友情関係も生まれました。中国遠征に行く前には味の素ナショナルトレーニングセンターで練習をしました。また、ドーピングの講習や食事の栄養管理などアスリートとしてのるべき姿を学び、とても勉強になりました。中国に着いてからは練習をはさみ、開会式が盛大に行われました。しかし、言葉が通じないことや、食文化が違うことなど戸惑いもありました。また、天候にも悩まされ急に蒸し暑いインドアコートでの試合もありました。私はプロを目指しているので、このような経験がこれからの活動に生かせると思いました。試合結果は中国に負け、2位という結果に終わりましたが、この1週間とても濃い生活ができました。三か国ではありますが、高校生の日本代表としてチームの勝利に貢献できたことはとても嬉しく、また団体戦という形の代表戦はとても貴重な経験でした。

この経験を活かし、さらに日々努力を重ね再び日本代表チームの一員になれるように頑張ります。ありがとうございました。

第27回日・韓・中ジュニア交流競技会に参加して

松下 菜々（兵庫県：相生学院高等学校）



はじめに、今回の日・韓・中ジュニア交流競技会をサポートしてくださった多くの皆様、そして、引率をして頂いた先生方に感謝します。ありがとうございました。

日・韓・中ジュニア交流競技会を通して私は学んだことが2つあります。1つ目は中国の選手は慎重が高くパワー負けをしてしまい、ポイントを取るのも困難な状態の中、どのように戦えば勝利を掴むことが可能なのか。しっかり考えてプレーしなければいけないという事を学びました。韓国の選手は慎重はあまり変わらないのにも関わらず、粘りのプレーを見せられ自分が我慢できずにミスをしてしまうという結果になりました。同じアジアでも体格やプレースタイルが異なる為、もう少し頭を使わなければならぬと思いました。

2つ目は、中国に遠征に行くのが初めてだったため、セキュリティーの徹底や言語などわからないことばかりで、どこに行くにも機械を通らなければならなくて、管理が厳しい国だと思いました。また、食べ物が自分に合わなくてもスポーツをしなければいけないので、食べられる範囲内で食事を選び、体調管理を行うことが大切だと思いました。試合などで海外に行く機会があれば準備の徹底とこの遠征で学んだことをしっかりと生かしていきたいと思いました。

第27回　日・韓・中ジュニア交流会に参加して

大川 美佐（神奈川県：法政大学第二高等学校）



まず今回の遠征に参加させて頂きました。海外に行くことも、日本代表として試合に出させて頂くことも、私にとってはすべて初めての経験ばかりでした。普段から食事などに繊細で、その場の環境に直ぐに慣れることも苦手であり、高校3年間の中で課題としてきました。話をしたことがない人がいるメンバーで行動することなど、不安なことが多かったのですが、普通では得ることが出来ない刺激を競技面でも、生活面でも受けすることが出来ました。中国に出発する前では、NTCでドーピングについて、食事の栄養バランス、摂取量などテニス以外のことについてたくさん学びました。特に、私は昔から体つくりが課題であったため、お話を聞くことが出来て良かったです。中国に到着すると、始めから言葉が読めない、通じないと言語の違いに苦戦しました。飲食に関しても不安があり、なかなか自分から進んで取ることが出来ませんでした。試合でも、相手の体格や態度に最初は圧倒されていたが、この1週間を通じて「タフでなければ勝てない」ということを学ぶことが出来ました。環境になれるなどを課題として取り組んだと共に、海外の選手と自分の違いを比較して、何が足りないかを勉強することを考えて、この遠征に行きました。海外の選手は、圧倒的なパワーとスピードで勝負するが多く、私にはないプレースタイルだったため、さまざまな新しい試合展開を感じることが出来て、貴重な経験となりました。今回の遠征で学んだことを無駄にしないように、これからも頑張っていきたいと思います。

第27回日・韓・中ジュニア交流競技会を終えて

高岡 鈴蘭（沖縄県：沖縄尚学高等学校）



開催地は「中国」と聞いてまず思ったことは、空気汚いねではないかな、とか、国民の人たちは怖いんじゃないかな。といういいイメージでした。

私は3試合出させてもらいました。その中で今後の課題がたくさん見つかりました。日本の選手は、リードしていたら「大事に行こう、大事に行こう」とします。しかしそれが結果守ることにつながり「チキって負けてしまった」という負け方をする人が少なくなっています。それに比べて中国の選手はリードしていても最後までギリギリを狙ってきます。というのは攻めの姿勢はずっと変わらないのです。これはすごく思い切って行って悔いが残らない戦い方なのですごく参考にしたいと思っています。

私は走るトレーニングが大嫌いです。

しかし韓国の選手のテニスを見て大嫌いとか言う場合ではないなと思いました。韓国の選手は粘り強いです。どれだけ走らせても取ってきます。ほんとにすごいです。韓国の選手みたいになつたら相手が打つ範囲がどんどん狭くなつて焦ってきてミスにつながっていきます。あんなに拾ってくる人は日本でいません。

韓国の選手と中国の選手を真似したいと思います。欲張りは良くないですが強くなるためなら欲張ってもいいと思います。いつも走るのを嫌がっていますが強くなるためにまだ走ろうと思いました。

韓国戦が終わった後体調不良で倒れました。記憶は全然ありません。しかし少し元気になつた時にずっとそばにいてくれたのは中国人の通訳の方でした。救急車の中でもずっと誰かに「大丈夫だから」と声をかけられていたのをかすかに覚えていました。通訳の方がずっと声をかけてくれていたのだと思います。ベッドで寝ている時もそばで「一緒に音楽聴こう」などと私が好きな曲を流してくれたり、日本の話をしたりしました。私は大きな勘違いをしていました。中国の方々は全く怖くなんかありません。すごく気遣ってくれて優しい方ばかりでした。イメージだけで判断するのは良くないです。

最後に、テニスの試合での貴重な体験だけではなく、中国の方と話すという体験ができて本当にいい経験をすることができました。この経験を活かして今後の大会で活躍できるように努力します。

全国高体連テニス専門部の先生方、また引率してくださった先生方、本当にありがとうございました。

日本代表としてプレーするということ

神鳥 舞（東京都：早稲田実業学校）



まずははじめに、この遠征に帯同して下さり、たくさんのサポート、ご指導をして下さった先生方、本当にありがとうございました。

今回初めて、日本代表ということで試合に出させて頂きました。普段、学校の名前で出ている団体戦とは全く違う緊張感がありました。日本代表として恥ずかしくない振る舞いをすることが大前提であるし、その上で本当の勝負をするという戦いはとてもやりがいを感じることが出来ました。

また、自分は学校の関係などもあり、普段海外遠征に行く機会はほとんどありませんでした。その為、日本人以外の選手と試合をするという経験が少なく、今回の体験はとても貴重でした。日本人とは体格やプレースタイル、試合中の態度など大きく違うと感じました。慣れない環境での試合でも勝負は勝負なので、いかに相手の雰囲気に呑まれずに自分のプレーが出来るかが大切になってくるということを学びました。

さらに、今回の遠征でもう一つ学んだことは、食事が合わなくても、無理にでもエネルギーは補給しなければいけないということです。本当に海外でも勝ちたいと思うなら、美味しさよりも、自分の体のことを一番に考え、工夫して食事をし、栄養を摂取する覚悟も必要だと思いました。

今回の遠征で、日本での個人の試合では経験出来ないような貴重な体験をたくさんさせて頂きました。オン・オフの切り替えもしっかりしていた為、充実した楽しい日々を過ごすことが出来ました。この経験を生かして、これからテニス人生、更に成長していくたいと思います。今回はこのような機会をいただき、本当にありがとうございました。